







重修真書太閤記九編卷之四

北越の諸將難戦の事

并羽柴方七雄鎗先高名の事

羽柴筑前守秀吉の機を見て變に應じると猿猴の  
 梢と傳ふり如しとせし許されし名将は今日  
 北越の大軍と見て少くも恐怖の色なく時と刻と  
 と見計ひ近習馬廻り以下と真先と進め下知あ  
 りゆるし剛將の下し弱兵ありと諺ふり如く  
 幕下の諸勇士のことも一騎當千の力の共故大  
 將の麾に從ひ我先よと馳出し九曲の坂道と車と

大開己九編卷四



もを以て勇進して北國勢と追うめく戦ひける中  
も伊木半七今年十七歳櫻井九吉今年十八歳共お  
筑前守の小姓ありけるら大太刀を真甲しのこ  
多勢の中ふ駈向ひ相手とさうを以て切立難立戦ひ  
ける石川兵助と此二人と合せて賤岳の三振刀と  
ふはどしも理あれや北越の軍兵心いやさげよこ  
やととも大崩と崩とさうら軍故誰一人踏止り  
切まぐる勢もなぐ次第くも裏崩として立直ひへ  
る体もなぐ終る名ある輩もとも平押しあされて  
逆行けるは是非もなぐ佐久間侍も大崎段右衛  
門といふものの引返し好む野の大身の鑓さうくと

打振く伊木半七も駈向ふ半七得さうと渡り合  
請つ開つ飛鳥の如くうけめくる段右衛門へ年積  
りて三十八歳半七と少年とおのひ悔り何程の事  
うあるくさ只一突お突おんとりけるも半七へ身  
軽く早うりしうの鎧の下とくり入た一太刀も  
段右衛門も大袈裟うける打果に敵も味方も是を  
みて天晴勇士やと褒ぬめめを無りばと宿屋七  
左衛門兼清の元武藏國宿屋住人鎌倉侍宿屋左衛  
門尉光則の後亂ゆう今へ越前も在て柴田り旗下  
一陣の大將なり名ある侍多く通けるを見て命ハ  
義に依て輕く弓矢取ハ名とあそおのへといひて



て、鳥居坂の南なる尾の口山と庭戸濱の境より  
取てゆく踏止り慕來る敵を追拂ひ味方と助て  
戦ひける處櫻井左吉とるる見付韋駄天の如く  
走來り無二無三入宿屋に切てゆく宿屋の  
二尺さうりの又廣の鎗櫻井の家へ傳へし貞宗の  
三尺八寸両方互に聲とけり合けり宿屋の  
うねて足場もさ處と撰ひ立たり櫻井は足場あ  
く兎角請太刀のさなりける時味方軍兵競ひ來  
りし越前勢總崩とて宿屋もあめく引  
立らば双方物さうとさなりけり左吉はあめく  
難義の處仕合よく引別と志し息と繼げる處と

宿屋り弟の同苗次郎助左吉と目よりけ飛めり  
鎗を棄て無手と組上と下へと揉合けるり左吉  
の元より相撲の上手なり念なり次郎助と組伏押  
つて首と搔落し紅よ染て立上る處へ黒竹と金の  
角取紙の指物さしたる武者いよ能敵と會と狩  
場の鷹の鳥立と求むる氣色よと走り來りける  
宿屋七左衛門と目よりけ鎗を打あり是は筑前守  
の侍も糟屋助右衛門武則なりと名乗るけ突りけ  
けし七左衛門も能敵なり討て柴田へ土産ふと  
んと鎗取直し突合けるり助右衛門りるととと穂  
先をわしらひくの思ふ跡さうしける處と糟



屋得たりと付入て宿屋う胸板とくさつと突貫さけ  
と何りの以てたまるへと七左衛門倒るゝ處と  
助右衛門透さけ踏めりて首を取左吉と相打と  
いふへけと共一旦の別としたりと全く助  
右衛門一人の手柄といありぬり

石川兵助貞友伊木半七櫻井左吉三人と賤岳の  
三振刀といふ

平野九右衛門の例の長刀と以て北國勢と薙倒し  
懸倒しびるゝ左迄名ある首とも得と如何もして  
も残念なりと猶深く切入ける處に柴田侍中村  
新兵衛黒母衣ふ金の六角の出りて味方ふ少

下りて引けると見付呼返しし新兵衛あり返  
り誰とて在る我等の落人なりと鎗と合はるも事六  
り組て勝負をくゆと言けると聞いて心得いと云  
より早く長刀と以て中村う太股と一刃をぬり  
しうの中村の理不盡なりと云ありし太刀と抜  
て平野と切りとつとも最初の手思の外深く  
強りりけるより終り平野と討とけり佐久間玄  
蕃允の味方追々討死し勢のまゝあるを見  
て使番と味方の備々走り早々引取りへ平野  
村の能場所あり彼處に屯しと敵を待たしと告や  
り原安井拜郷と大後殿とを鉄炮少々打を引



退さけるのみ弟の孫六正頼白木の森より押崩さ  
ど是非なく敗軍より引立ちて引退を味方とする  
み兄の久右衛門のう成し影も見へぬ口  
惜し今一度引返し兄の行衛と尋ねんと鞭と揚て  
馬と馳を飯浦山の坂のあし尾へ來めり處に  
平野權平長泰白紙子の陣羽織に三團子の指物さ  
し寄來り互に見合莞尔と笑ひ参りゆと云ま  
し鎗と志と突合たり然るも孫六り鎗のう  
たりと突込處へ孫六と尋ねて小原新七駈來りか  
くと見るより孫六討と横合より平野と目よ

懸突めける長泰めくと見るより面倒あり其處  
退ゆつと聲と懸小原に向へ孫六の兄と尋ねて  
其場と去長泰の孫六と打めり安らぬとよお  
のひ小原と討んと揉合たり小原の北國も名と得  
たる侍りの勝家旗本も在て多くの侍の進退と  
もしつる剛の者あり今日の軍の次第味方敗軍と  
見極め命のさても何うせん是非戦死とおのひ定  
めし處をど一足も引け突合ける終に長泰も  
胸板と貫きて倒せける長泰とるさ首と取傍  
の石も尻をけあむし休息しける處へ北國勢の中  
より松村友十郎と名乗權平り横手より鎗と突出



とへ長泰あり返り志ありし敵の振舞やその心  
み免し相手よみらんといひあうう扣らる懸つあ  
へし突合けるも友十郎いりううたりけん片足  
つよのさ倒しけるも權平踏込てひれと突伏終  
首と取てけり

佐久間兄弟賤岳と出る事

并加藤孫六出立美麗の事

佐久間孫六正頼兄久右衛門正次と尋孫敵の中と走  
廻り終り兄弟一所み打寄さるも今度の合戦神部  
兵右衛門と一手みたり中川り小屋と焼立敵と狼  
狽をいぬしよるさしも手剛と瀬兵衛尉と追崩

し終り是と討取しめて機十分みし味方の鋭  
氣ありしと拂ひしういその跡よ七し近邊と追捕  
したうしよおのひもるを筑前守火急よ美濃路  
より引返しそれよ繼ぐ京勢雲霞の如く野あも山  
あも満々山々峯々と傳ひ若々よ加勢のりみよ  
う籠鳥の思ひとあしつるゆの共俄よ氣力と増鯨  
波と作り螺金とあしつるやともとれハ寄手と  
追退けあんとする勢河のさよより越前勢のつとも  
戈と倒れし日頃の勇氣とどう失ひ宗徒とたのこ  
し面々あて心々よ落失今ハどうりよ敗軍の餘兵  
幾許もいしめて柴田の家の難澁此時あるべ



我等おまひひよ一族門葉の上首たり面作の滅  
亡とらふ忍ひをいふ兄弟一處に討死して敵  
と疲らし暫時も面作の死を延ばさずとあの  
ふいのうよと云ハ孫六九なりと同心坂中より  
引返し落る味方と勇め追來敵と待うけ天晴  
佐久間久右衛門尉盛次の子供も柴田修理進  
妹の子はれはなすへし處へ佐久間乳母  
夫神部兵右衛門尉水野助兵衛くく來り殊勝も  
も見へたまふのりか武士はうくおそ有なけと  
但若く御身なり軍ハ今日ハ限夕へく柴田殿  
の御運ハ末と見ていへとも此度柴田の一跡をか

断絶とんも口惜うへ爰とん我々受取てい早  
御退いて玄蕃殿の御成行とも御覽いへと諫むと  
とも思切なる若武者の勿々思止まる氣色も  
兩人頻りに言葉と盡すのつとふも面作の先途と  
見そそあふちと忠とも勇とも申へげととり立  
ゆる處へ上方勢黒く渡りて寄來てハ神戸兵左衛  
門兩人の鎧の袖と取是非あり退むくと勧めけ  
るよあり久右衛門兄弟も諫む從ひ此場と立退け  
ある案の如く越前大敗と一族即從散々あり  
玄蕃久右衛門兄弟此戰場より何地とも身  
隠し如何もいへ筑前守を討死叔父の鬱憤と晴







しりとも逆も勝へし軍あはる脇坂へよと敵か  
り討得たりへ匠作への土産なりとおのひりへ  
脇坂と尋ねける安治へ是非水野を討捕んと  
是も同じく探し求めけること再度めらり合後と  
なるも水野助兵衛と聲うくこの助兵衛何とそ後  
とへ先より其方を尋ねりりと答へあり又鎗  
と取直し半時より突合り何と仕たりけん  
水野の槍をのりゆる松の樹に突たて抜んとそ  
とともたれりて抜次太刀を取て脇坂へ向へし甚  
内安治鎗を引下し身よりて助兵衛の肩先をと  
つしと切さる事とてとこひるむ處と脇坂おくと

聲うけたりと馳入て突ふを直し首と取て立上り  
猶も進みて追て行越前方より水野討とりのち  
果敢く敷防くものも無りしうの既よあの坂口破  
とんと何とけるを見て神部兵左衛門の老練の古  
兵とのひ武勇へ若と時より北國に聞えしものか  
との急度おのひける様此坂口とあのまよし引退  
たらし上方勢雲霞の如く押来り匠作もわたくし遁  
れあふと難うるし上方勢と一方便しと  
欺る呉人と坂口と打棄峯に攀上り大音揚て敵間  
近く寄来りしめつて脱とあふとめさるるく  
覺えし急と御腹めされしへ神部兵左衛門命あ



ん限り防矢仕... 散々下し矢射たり... 十六七人射倒されたり... 覺ゆるを責上りて高名をよめと呼らるる... 坂の手... 軍の延よげり爰に加藤孫六喜明の富士山の禿と... 著し佛洞の具足の胸板脇板も天人の雲よのり... 衣と掛たるは紫雲たふひく景氣なる... 越前勢

もこの出立の珍ら... されとも孫六い... 文字の鎗と打肩の崩... 乳虎の幽林と出る... 不處に浅井吉兵衛則政... 退けるも後より... 我等も後と見... 軍の事とひひ夜軍あり敵味方のおひらも分ら



誰のあゝあゝんむあゝ見逃の堀尾茂助中村孫平次  
渡邊勘兵衛のさしもの月影も紛れなく見へる  
互に武邊と磨くめのあゝの意氣地ありのめくる處  
とつて対とつて淺井吉兵衛立止りしうの孫六  
とこともためふは真倉よ突めらる吉兵衛何人  
あると名乗れとのめれで知れぬ筑前守の侍も加  
藤孫六喜明なりと名乗れ吉兵衛のめくると打笑ひ  
越前馬喰の俄侍もの方と戦ひぬ鎗と取て何う  
とんとひひつと礫とらとと打ひ孫六も運や強り  
うけん傍に立たる雑兵の眉疵と微塵も碎けぬ忽  
と敗れて倒れぬけり喜明悪し吉兵衛馬喰立の十

文字うけても物を突くは吉兵衛も鎗と合をける一呼一  
吸うけて打打ていけり段下段もけしと体ハ電光石火乗  
つのもつためへりやまじうあゝのさつ花々物ふたと  
へと取んとを波とらる兎もめく目さす吉兵衛心ハ  
剛あれと味方の敗北は心あゝとその上月ハ曇り来て足元更  
も定るあゝの木根もつらつと倒ると孫六尋たりとのめ  
う終は首どのと切て悦び勇むと大方あゝは猶も手あけく北國  
勢の逃ると追て散々も突立けし右往左往も逃行ける中あも  
柴田佐久間も片腕と頼る北國第一の勇士も安彦彌五右衛門  
といふのあり崩れとさる味方と助け鎗と以て突拂ひ難めを  
扣るとびるめとさ上方勢突白やると引足し見へたりけり







作ハ安彦彌五右衛門と打加藤孫六ハ浅井吉兵衛と  
打脇坂甚内ハ水野助兵衛と打平野權平ハ小原新七  
松村友十郎と討粕屋助右衛門ハ宿屋七左衛門と討福嶋  
市松ハ拜郷五右衛門と討加藤虎之助ハ山路將監正國と  
討これハ賤嶽の七本鎧とのハ石川兵助ハ安井四郎五  
郎と討伊木半七ハ大崎段右衛門と討櫻井左吉ハ宿屋  
次郎助と討是と三振刀と稱と

重修真書太閤紀九編卷之四終

重修真書太閤紀九編卷之五

柴田權六勝久救玄蕃允事

并丹羽五郎左衛門尉於陣中病氣の事

佐久間玄蕃允盛政今年ハ廿九歳其身の剛勇  
と以て人の諫と用ひをたまふ大岩山の軍み克  
より上方勢と侮り老練の柴田匠作と却て老耄を  
りと云て是と朝り使者の説と用ひを天正十一年  
四月廿日の夜賤嶽の軍破と宙刻といひて弥上  
方勢追迫らと拜郷五右衛門水野助兵衛淺井吉  
兵衛宿屋七左衛門同次郎助小原新七松村友十郎



安彦彌五右衛門山路將監正國戸波隼人安井四郎  
五郎大崎段右衛門以下追々戦死しけるより味  
方兵氣振る路次の嶮岨より殊更夜のすく曙さ  
しにおのりさあけ落行今の漸柴田三左衛門尉勝  
政り三千の勢と玄蕃り腹心の者残り少あり討か  
されて猶いまま戦半あり此時修理進勝家も旗本  
と以て一戦をくゆと思ひ人数操出し去りとも菅  
浦谷の堀久太郎秀政小川土佐守木村小隼人其外  
筒井順慶法印中村赤松り輩打出路次塞さ弓  
鉄炮と打りけり手繁く攻懸りけるも賤岳に向ふ  
て玄蕃元と援ふと能く兎角とるうち玄蕃元

小付従ひ雑兵走來て味方の軍敗とあり侍  
共多く討し金森五郎八入道徳山五兵衛尉等い  
や既に引退し原彦次郎安井右近の別と引退  
山路拜郷宿屋兄弟淺井安房守等の戦死し今  
三左衛門尉殿と玄蕃元殿と只二手の討あり  
して其上より上方勢の幾千万と云と知と峯よ  
も尾よも満々ていと注進し勝家大に驚さあり  
默然とく物いよ良ありて申ける世あも不  
思議なるるか木下藤吉郎故大臣殿の御草履より  
より出身し侍となり馬に騎さる分対の思  
ふへさ長濱の城主となり羽柴筑前守といわれ



中國の探題職と許され累代家老たりし我等と同  
し程より上り刺故大臣殿の公子達と輕侮し終  
ふ今日只今ふ至り我等と弓矢と取てりくの如し  
是併天の我を斃しめし時といふべし何とて人々  
恨むべき今も我股肱と頼り人々日頃の約束  
とたりべし戦死ありしと嬉しとも喜ぶるとも云  
へし詞と知れ我旗本の兵士猶一万余人ふ及ふ反  
令の筑前猛帝驚龍の勢力と恣ふるとも何を恐  
るふ是れ人勝家身と以て猿冠者と決戦し且ハ戦  
死ありし人々の供養を備へし最期の軍あり花  
花しと去て若者とも眠りよとさまびへし但權六

勝久淺見但馬守兩人ハ早く玄蕃と三左衛門尉と  
と迎え來りし幸ふ如法夜中のことなり袖笠印と  
めをぐるり捨敵よまるとて疾々よ其間ハ勝の  
あつたる上方勢と勝家一あて當て見とへしとい  
ふ程ハ二千餘人と引分て二手となり柴田權六淺  
見但馬と出立びそのうち勝家のつきの手ハ向ふ  
へさ上方勢と見こるは若々の筑前守の加勢ハ  
氣力と増つし何となく螺を吹さくちと摺て鯨  
波と揚又此方よてハ鉄炮つるを放しよるか  
け敵と見とハ打出し駈かゆよけるふり爰そ  
よこ責口とおの虎口も見定めめつ味方と見



此の處々にて戦死したる打殘しの兵士とも何も  
 重手薄手一ヶ處二ヶ處負ぬのめもよくそれも何  
 くく逃行ふことと落支度とのさしけるあり  
 さしめい猛さ柴田匠作如何をとんと諸軍勢ありぬ  
 ころして居たりける又上方勢の中より渡邊勘兵  
 衛、浅井吉兵衛と目よみ見知たること聲りけ追を十夜中  
 ふれい見失ひいと加藤孫六嘉明討取し口惜さ  
 殘念さいもんめさあく夫より能敵と討ちかとい八  
 方よ目と配りて稼さける處よ浅野日向守赤尾孫  
 六西脇彌五衛門相續さて力と合を戦ひける柴田  
 三左衛門尉勝政ハ兄玄蕃元と一手よかりをゆと

虎口と見合居ける處よ上方勢押重ありて段々  
 寄來り透間あひさの味方の追々打取し手勢殘  
 り少なきなりけるあり賤岳の峯通りと徐々と  
 引取ける不圖羽柴筑前守の手より鉄炮手細く  
 打掛てさしひ來り會柴田三左衛門尉勝政少  
 も騷り行へる處まで行のとして人數と押けるよ  
 餘りよ手近く付來り一時勝政あり返りての返を  
 かのといふあり鉄炮の筒先とそろく打をいさへ  
 黒烟曙の雲よたふひさめり敵も味方も見え  
 けり勝政いで鎗と入よと下知しける柴田り手  
 の壯者とも從横無尋よ突立る上方勢く追柴田



り手ののの働をアしとおのをぬい念なり突立ち  
し二三町りやと嘯と崩して引退く其原より足輕  
と引付鎗と射とせて人数とあつめ峯通りと  
又徐々と引て行板する玄蕃先盛政ハ我意と募り  
て此敗軍に及び上ハ再度匠作と面と向んと  
恥しく且ハ我を為し討死と諸侍の子弟眷屬  
のあつらん處も後めさく思ふ程戦ひ此場と去ハ  
戦死ををゆと思慮と極め敵の多勢と事ともを以  
例の鉄の棒と打ちみく拍と立打ひし死生とら  
へみ戦ふると上方勢多く討とげり又丹羽五郎  
左衛門尉長秀ハ始より筑前守と援け出陣と一處

ふ北國勢とて敗軍と上方の軍勝つと期至りぬと  
あつ他の勢とより只一手旗とてめその  
身真先と進み米配と取軍とハ勝たるを手柄とを  
よわ若りののととあつて下知しけむ江口三  
郎左衛門尉坂井與右衛門丹羽主税助溝口金右衛  
門村上次郎右衛門とて南部無右衛門古田五  
兵衛望月文九郎成田筑後同助九郎太田小源太  
谷與兵衛青山伊賀櫻井助右衛門上田植木日野種  
橋のとも主人と方らぬ勇士なり士卒とをけま  
し鉄炮と打ちける中あも江口三郎右衛門村上  
次郎右衛門南部無右衛門成田筑後等ハ自身と鎗



と取て鬼神の如く荒廻り佐久間陣とらち破り  
 玄蕃元と討取んと真先と馳ける處へ北國勢の中  
 へて武勇拔群とよむれし原彦次郎旋風の如く馳  
 來り玄蕃元と引替り丹羽の勢に向て火花と散  
 戦ふると丹羽の勢も大よ切らると五郎左  
 衛門尉見るもさかあし若者とも軍の心くと  
 るものそと立上りける時折あし持病の積さ  
 起り苦痛と及ひしりとも織田家とて鬼五郎左衛  
 門と呼と下との猛将なれりちとも擬義を及鎧  
 の袖とりのり身とめて下知しけるいりよ  
 かつり差込進退もも不自由み見つるあり

丹羽家の老臣いつきも驚と御持病の御事あり此  
 場と御引上御保養ありて然るへんと諫めし  
 めとも長秀更し聞入り勇士の習病よ死をると恥  
 我幸よ此戰場よ死をへ本望はうとのひ捨猶も敵  
 に向て曳々と聲と上つて叫ひ言りけるあり江  
 口坂井村上溝口等とらちめ敵より主人あを大事  
 あれと取寄人抱あしけし長秀大よ怒り我の病  
 の起りしものなり汝等あを氣も魂も失ひつとそ  
 し櫻井助右衛門南部無右衛門青山伊賀望月久九  
 郎等足輕共よ油断なく鉄炮とらちと射手と揃  
 つて敵と射る何も四方よ目と配し我とらち顧

大陪言九續卷五

五



さるあゝ胸と押えて立上り大音聲下知しける  
いりらも勝とて見つゝけり剛将の下は弱兵あ  
一 大将如此あれい士卒何も心と一川のや一鉄  
炮の筒先と揃て打立矢先とそろくさゝめ引  
つめ射けるあゝ北國勢立足と立くひたり賤岳  
の栗山修理久羽田長門守黒田官兵衛いつとも柴  
田三左衛門尉り備と目よりけ横合より突掛しり  
い佐久間玄蕃久原彦次郎一いつなりて切立ける  
と丹羽の家老江口村上丹羽溝口坂井いつとも死  
力と盡して防と戦ひ思ひくよ高名しけると見て来  
山羽田より三左衛門尉と打とて玄蕃久と打取丹

羽う手柄よさせいと進めけしは原彦次郎大身の  
鎗と打あらし栗山羽田よ向ふ栗山羽田り勢とも  
原彦次郎一人よ突立ちし羽田ハとてよ原よ討る  
へうりしと長秀下知けて江口三郎右衛門よ横鎗  
と入さるをけしは羽田漸身とのりれ味方の内へま  
らと入原彦次郎へ丹羽り兵とらるより莞尔と笑  
ひ長秀と討へ安けしと盛政の行衛の心元あけし  
へ今日いゆるをなりといひつゝ駒引返して玄蕃久  
う勢よ加えりぬ嗚呼時あゝか僅二町をかりの  
内よ北國勢大よ責破りて浮足よなりてたゝよひ  
ける處へ堀久太郎秀政以下若々の勇士一時よ切



て出まうへ三左衛門尉も玄蕃元も立足しとらふ  
 切立られ神部兵左衛門の勢と合を百騎計りて扣  
 え居ける處へ權六勝久并し淺見但馬守二千余人  
 きて迎えけり此勢と以て盛返一合戦をんと勇  
 りけり  
 柴田權六勝久玄蕃元と諫る事  
 人原彦次郎再度の軍と勸る事  
 越前勢の内も侍大将たりし不破彦總へ手勢千  
 余人もて一番し落行安井右近も我勢と引纏て引  
 退さけりよる次弟も無勢もあるのこあはる  
 股肱腹心と頼むつる拜御山路り輩へ戦死はける

よより玄蕃元も今へ是迄のうとあひ切一處へ  
 神部兵左衛門百騎とらうりよと馳來りしうへ此勢  
 らうりあても今一合戦とあひ馬の頭と立直し  
 けると柴田權六淺見但馬守らるのし見付二千余  
 騎と真丸も備つて馳加らう匠作の心入もむさ  
 來りし由を告しうへ玄蕃元益氣力と盛んし  
 りし備えと堅めとてし打立んとやしけるよ原  
 彦次郎元治使者と以て申けるへ只速し某と共し  
 引返し一合戦仕あへ某御先仕しへ是死地し入  
 て一生と得る處しといをけるよる玄蕃元  
 も充つると同心し追來る上方勢の中へ割て入例



の鉄の棒よそ四角八面ふたさたて打立しりハ  
忽二三十人算とてうち倒さど死生ハ知を  
目さすもくも又いさすも 實も北國よて鬼とよ  
ひけんとあを偽あうね勝りたる上方勢あふ  
なりとゆあひけん皆うて寄て近付ひ玄蕃允ハ  
是と見て三左衛門尉の手へ使者と遣こし早々引  
返しゆへといとんととと柴田權六郎勝久あし  
止めあひ物よ狂ひあふり斯敗軍よ及ひあふよ  
り血氣の勇よ逸りうち負あふこと面あしとて討  
死をとあひひ定めあふあうりゆさうとい狭さ  
心中うお匠作とてよ其軍と案しあひさそあを某

と迎よ立あひし軍の習ひ勝も負も時の運ふ  
り漢高祖の七十餘度大りとい負あひし共垓下  
の一戦よ勝あひし終よ天下と一統しあひし  
なり拜郷山路以下諸侍の討死たよ匠作のため  
大ある損よてい其上よ貴邊討死あう匠作股肱  
と失ひあふよ同し早々引返し本陣よ入て兵と養  
ひ重祓ての合戦と心懸あへと諫めげよの玄蕃允  
頭と打めりいおとよ勝久たしり聞某いやりも  
一方の大将より身なり附従ふ侍とも大り討  
死したると知と顔と何とて本陣へ引返をへと敗  
軍の将ハ用ひりしと云よあふひやうもあ



長詮議ふ時と移し匠作の待くしひきあらん返  
と返をも最惜いし早歸りあへ一旦の逃しあれと  
も上方のぬく若とも必定やとめり返をへけと  
勸めしうの勝久あし返し貴邊の左様と宣ふと義  
心といひ勇氣といひとと問ふし但本陣の勢も大  
形落失て今い旗本ころりなり夫さへ大ふ力を落  
しと甚手薄く見請い此節引返しあひあひ何も再  
生のわめいしとあそとへさなり疾々思案し替あへや  
と響し取付諫むる處へ淺野日向守兼山修理亮羽  
田長門守一万計の勢もて押來り玄蕃元と見すい  
ひり目りもの見違し追取こめて討取と聲々ふ呼

ころり呼らり責來ると見て淺見但馬守神部兵左衛  
門悪し淺野日向守いて手柄の初と見はつとそ  
といふまゝと鐵炮六七十挺筒先と揃えて放ら  
けその畑の下とめいくとて八九百余騎あひて  
ゆあらし懸さうしうの羽田兼山忽あしけ萌され  
蜘蛛の子と散らさう如く逃退さう玄蕃元あれと見て  
淺野ら手ふ向ひ四尺五寸の太刀と以て當ると幸  
ひ切て廻し前後左右と切倒さるゝの其数を  
しらひさとも上方勢ハ多勢なり入替し攻け  
ると玄蕃元只十人弓手馬手ふりけ廻りあるひハ  
拜と打又し拂ひ切太刀ハさくららの如くさうと志



めも血も染るるど打ちりく敵の中へ懸入懸出十  
四五度及及び一りとも薄手一所負もを以氣力よ  
そまを盛んせぬ浅野の手の者りてあまし裏崩  
しりて引返下けるを見て權六勝久玄蕃元の鐘の  
袖よそかり只今の御振舞異國の樊會ハ見も知は  
我國よハ又あるへしともあはれ之は是とあはれ御  
返し後日ハ大功と立あへり来と頻りし諫けしハ  
玄蕃元打笑ひるも事ハ心得ぬ御邊のいひ条々  
あはれ見あへ敵ハ軍ハ負て勢加る味方ハ勝と  
いへとも援け加らる新手ハ然ハ當家滅亡の期  
至りぬと覺えさう今夜の敗軍某り深入をハ故と

大開言ヲ終卷五

十

おのハ人もあはれけしとも全く龙様の事ハあら  
は是偏ハ勝家亡ひあふへし先兆なり其故のうみ  
と云ふ前田金森等の如き大将のつとも勝家ハ背  
さとのむくハ所領へ引返をのむるハ北國の  
百姓一人も陣見舞ハ參上とするものなり是全く今  
日の軍の勝敗ハつて然るハ非ハ日頃より此等  
の人々ハ疎まれあふり故なり筑前守り手ハ丹  
羽五郎左衛門尉と始め大勢の大小名のつとも二  
心なり親ハ暱ハいのもあはれ江北の百姓ハ  
赤子の父母と慕ふよ似て馴睦ハ手足の如く働く  
と見よハ一定天下ハこの猿冠者ハ靡ハ從ふあは

大開言ヲ終卷五

十



め衆人の心いをかゝるち天の心なり天の助る處人  
 たり是叛くへけんや盛政うてあらんやとい  
 匠作も匠作も在るといへば盛政此陣と引たらん  
 とい何とて暫時も休まぬ入へて早立帰り匠作と  
 伴ひ越前へ引退ら其後ともめくも成果あくと道  
 理と盡して教訓しけいハ勝久も又言へて詞あり  
 さいうのむさで居らうけり玄蕃元のひ上りて敵  
 陣と見らるる天晴大勢やこの大勢よて我等一人  
 と討得ぬとあそをうかけば但加様幾段あもかたを  
 ハ必定空虚あるへけれい筑前守り旗本へ切入  
 猿冠者と組て勝負とあそへけいと云ハ權六も大

小悦ひこの究竟の計策と兩人一所よ成て上方勢  
 馳向ふ原彦次郎淺見但馬守あゝく續いて駈  
 けいハ上方勢散々よ切立ちと四方八方へ逃たり  
 けり玄蕃元も權六も彦次郎但馬守三方四方よ引  
 こらとて戦ひける處へ三左衛門尉も返り來り味  
 方と助け戦ひあゝ是も筑前守の旗本へ切入  
 んと同一馬の首と立直し火水よあれと駈さり  
 けり權六勝久是と見て何様ゆゝく振舞あふ人  
 人うか我とともあかしく死して共よ四出三途よ  
 趣くへさなり匠作のよちあふんとも心苦く  
 おのへともあかしく處よ來會あふ何とて唯一人



逃て引返とへると大よ勇とて見へけいけい  
も仰の如く我々も何うの逃と申へき御供申  
いんんとて先陣に進む人々ハ長井五郎右衛門青  
木勘七原勘兵衛鷲見九藏同源七豊鳴伊兵衛毛家  
新内いつとも一騎當千の勇士なり折しも原彦次  
即淺見但馬守神部兵左衛門一所又打寄めくの如  
敗とのめり味方おとゆも面々志と一川よか  
窮鼠猫とつむの理と忘るるあうとつさめり  
川筑前守の旗本さして馳りくる

重修真書太閤記九編卷之五終

重修真書太閤記九編卷之六

中興武家一番鎗古實の事

并加勝虎之助生筈指物の事

北越の大軍筑前守の神速ある智勇も碎りれ四方  
へ散亂し中あの日頃名と知し草ハ大形戦死し  
諸備いつとも敗走しけるあう采配と許されし  
ふとの者の柴田佐久間と勧めて二度の軍と催ふ  
一賤岳へ取て返とへしと議しける處筑前守の  
本陣よりいさつ勝鬨を上げて味方の氣と援けり  
ハ總軍のうち敵の粉と入てあうめをとんとの



深意より此式と取行ふと云ふより味方の勝  
関の合辭より曳々唯々の次第を経て約束され  
是と誤とされとも紛と入りのめられと知る  
忽と探り出されつと云ふ其後百實檢の式と行  
と頸帳と記さしげりよ一番戸波隼人頸山路將監  
頸加藤布之助討之二番安井四郎五郎頸石川兵助  
討之於其場兵助三番并郷五左衛門頸福嶋市松討  
之四番大崎段右衛門頸伊木半七討之五番宿屋次  
郎助頸櫻井佐吉討之六番宿屋七左衛門頸粕屋助左門討之七  
番小原新七頸松村友十郎頸平野權平討之八番水  
野助兵衛頸脇坂甚内討之九番淺井吉兵衛頸加藤

孫六討之十番安彦彌五右衛門頸片桐助作討之と  
のち追々あれと記されよとも七本鎗三振刀  
と世上よひひとゆされし此十人と以て頸帳の  
第一と賞美をもちしなり抑との頃鑑と以て高名  
の次第と立るとい根河泉の大守楠正成朝臣の遺  
法より楠家の老臣天野了觀の定め処と云や  
あるひ天野了一初源左衛門尉信國とゆひ  
とも云よ但正成朝臣の意より造り出されし  
いあつひ上つ代よひとらさの八尋の梓といひ鉾  
鎌鉾鯨尾鉾と云一ののめあつつるふよりと其  
進退の作法と立られしなり其長二丈と一丈



二尺ののの侍の持鎗より戦の闘ある時不利  
有と云り其優劣と論するよ長と一列に備ふる  
と善とこれとも中よ就て先登する自然の勢を  
り因て是を扱先の鎗といふ扱先より敵地に入  
と一番鎗といふ敵地に入てをめて獲る所の頸  
といふ然しはもう一番頸と定むると執筆の老練  
よあると云りたといふ敵地に入と十町より獲  
たる頸の本陣に至ると敵地に入と二三町より  
獲たる頸の著到よ記といは往復廿町と五六町の差  
ある故なりとや然し著到の吟味偏り戦場の  
武功の数よ依て指南と請へといはるは但今

度十人の働へ坂尻より白木の森廣戸濱との間  
より五町十町宛隔りしりとも同時の著到あれは  
比類ある趣感状よ載られ小袖廿重よ知行五千石  
の折帛と出されしより勝鬨頸帳の式終るとその  
儘筑前守たち上らるとあの競ひよ修理進の本陣狐  
塚よ馳向ふへこれと討破んと囊中のののを取  
ふ同一と士卒をせめられける處へ美濃守秀長の  
使者より乗り注進しけるは越前勢總敗軍とふ  
り右往左往よ逃走りひつる処よ柴田權六同三  
左衛門尉佐久間玄蕃元原彦次郎神部兵左衛門敗  
軍の恥辱と雪めんとて必死なりと返り來りて



の勢よとよ破竹の如く味方おれと防くよ力と竭  
し手と碎さいへとも敵兵いつとも死と顧るは勤  
さい間味方頗る難義よ及ひい急と御加勢いへ  
と喘さく言上とさうの筑前守打笑ひさもある  
ア然とて何初との事とり仕出とさといさる  
る處へ来山修理亮羽田長門守おかしく使者と以  
て越前勢二千餘の勢と三手よ分て大返しよ返し  
いの中よ佐久間玄蕃原彦次即り働と抜群よ  
味方大よ駈惱され浅野日向守浅井彦次即赤尾孫  
助討死し當方とふら難義よ及ひい急と御加勢  
と被下へと注進しゆると筑前守聞ぬあうよと

味方の若者とも昨夜よりの戦功異國へさる我  
國よいひまに聞も及む別と希之助市松助右  
衛門權平甚内助作孫六めく仕と當代無類の勇  
士一人當千といふア然ら其方共七人の敵七  
千よ向ひつへ然る越前勢とらうよ二千餘か  
さい不足あるへいさとも罷向て切棄けよ急け  
と下知しとくいひつとも大よ悦ひ我先よと馳出  
しゆる加藤虎之助立ちり筑前守の前よ  
みより清正美濃路より火急よ御供仕りさ一のの  
と大垣よ殘し置い因て只今ささうの車よ  
間生笹の指物用ひ申度いあられ御許と蒙りい



とて言上しける時筑前守聞とて例の大音よ  
ていうる虎之助生笹とさるる生梅の例よあ  
ふへ異様のさしめのはむりあり戰場よて自  
然の軍功よありて用ひしなり平常のさしめのと  
取落し軍士の七んで事う計りよて面白ゆ  
け清正との侍り風情もあて所望うか能々案  
て見ゆへとて更よゆるかて清正承り何り  
故あるとて御説と覺えぬ敵いとも近付たり長  
長と考ふとて時よゆるはとのひ終り直り越前勢  
みりけ向つひ清正う即等木村又藏井上大九郎加  
藤清兵衛前後左右引とひ烈風の木の葉とさそ

ふう如くうげとて清正と見返り森本儀大  
夫と呼青竹一本切來とといひ付又原彦次郎り手  
へ向ひけしハ驚見九藏同孫四郎儀貝九郎作二三  
百許よて真先よ進む清正莞尔と打笑ひ殊勝氣よ  
見つる物ともうかひて其首打落しとて  
雷の如き聲と發しとけ向ひ手の下よ突ふとて  
ハ頸と取取てハ笹の枝よ着驚見兄弟とらめ十  
一までよありしうのさしめ大なる竹あれともあ  
るひ屈けるとそのまゝ本陣よ送り着到よ記さそ  
しと筑前守見あひ出來たりあ席之助とれあり  
生笹のさしめの勝手たるべいと許されしとて



本陣討伐の事

そのく生梅と箴せんはさしたるハ梶原景季かじのらかげきり矢種やねを  
めくをむりの例なり三角柏さんかくかしと笠印かさいんよをい  
山内の經俊伊勢つねとしんいせの國佐々良嶋ささよしよての古事ふることなり筑  
前守つちまもりもあむらの事を思ひ出して清正せいせいの軍功ぐんこうを勸  
めらむとて知しるなり  
賤せん嶽たけ七本鎗ななほんやりの面々おもむき働はたらこの事  
并盛政なりさか一人筑前守つちまもり規のりふ事  
去程きりやうふ北國勢きたくにせう筑前守つちまもりの本陣ほんじんふ切入きりいんと勢いき猛まうく引  
返かへてあらハ上方勢かみかたせう大おほ仰おほ天あま浅野日向守あさのひなたもり淺井彦  
八赤尾孫六やくしおのそむろく即すなは西脇彌右衛門さいわきやゑもん等枕らうまくらとありて戦死いくさし  
しけるふり北國勢きたくにせうのよく力ちからと得勝関とくせつかんを作りぬ

け大山の雪の壓おさり如く又滄海の潮の湧わふ似てあ  
ひた々々寄必死きひしよとて働はたらさけるなりとよ若々  
よりいづとも本陣ほんじんへ使者しやと仕立て加勢かせうと請まをふと  
櫛くしの岬さかと引ひり如く北國勢きたくにせうの中なかより原彦次はらひこ即すなは手  
へ加藤希之助かとうのきのすけふ切破きりやぶらと鷲見兄弟じゆみけいとてめ悉しつく  
打取うちとと頸くびハ生笹なまざさの枝えだよ付つけらと清正せいせいの武勇ぶゆうと顯あて  
しけるふり忽たちまちふ萌もと立たてりハ彦次ひこ即すなはもせん方  
よく一方打ひとやふり何方いづれともなく落失らくしつたり又福嶋ふくじま  
市松いちまハ淺見あさみ但馬守たにまもりり手てへ向むひ面おもてもあらは切きり  
りけるその烈はげしと旋風せんぷうの如く早はやめりけるふり  
但馬守たにまもりわらひり縁ゆかりちと浮足うきあしと見るゆかりか福嶋ふくじま

八幡巴七郎

六



大内言九...

り侍ふ福嶋十兵衛あれの後丹波とのひり男な  
り吉村又右衛門桂十兵衛あし聲々名乗うけ主  
ふ劣らぬ責のけりり但馬守一ものあつと引退  
る玄蕃と一手ふあひそゆとおのひ勢と中とめて  
引上んとこると福嶋見ゆる道と追掛鐘  
と握て一突つくと見しは但馬守の押付の板  
り胸板すと穂先白く突出たれ何うの以てた  
まるへる馬より落ちて死してけり大将とて討  
つとい浅見の手いさて敗走蜘蛛の子の散如く逃  
失けり神部兵左衛門原勘兵衛一手ふありて引返  
し能軍しひる糟屋助左衛門追立られある

へ鎗と合とひるよ何とう仕たりけん神部も原も  
同く粕屋と突あをりて討とけり青木勘七長  
井五郎左衛門尉へ柴田權六と一所進んで上方  
勢と追やうりうり勇と立て此勢と抜さ本陣ふ切  
入るゆと競ひりりける處へ平野權平あまひま  
しと馳めりりり青木も長井も平野と打て其  
後本陣へ向ると健う立て戦ふると柴田伊  
賀守の與力神谷越中守足田左近左右より平野を  
援けて討りりり平野の名譽の射手ありりり  
追取切て放さるあやうり青木勘七馬より真逆  
し射落されり是とい見と共見ぬより北國

大内言九編卷六

七



勢猶もくけく切うらると權平二の矢まき長井  
五郎左衛門と射落たり二人の大將めくありと  
てしうの其手の軍兵散々ようちをされて引退く  
されとも如法深夜のこなれへ木蔭谷道暗くして  
思ひうけあて討するものも多うりけり柴田權六  
勝久の年猶若くありけしは勇氣よるやうて真先  
進と戦ふと足田左近大将ありと見知つては只  
一鐘よと競ひめぐるや權六目くらやく見付とのこ  
の匠作の思とうけあうり伊賀守と勧めて筑前守  
み従るしや一不忠めのおめひしきやとのひささ  
と繰出ひ鎗と請をんし左の肩とまてくうみ突と

しうの左近そのまて倒とふしたると暗夜あれ  
首へ取とを神谷越中守も同く權六と目よりけ  
進と近川くと權六う乳母夫本條忠次うけ寄て神  
谷う兜の真甲と割と碎げよとまてくうみ打と  
とて越中守尻居よととうと倒としう共權六う進  
行と忠次心元あしとあめへ神谷と棄てをしり  
行然るや權六一向本陣へうけ入るものと思ひつ  
進と一處よ片桐助作馳來り柴田と見て馬駈居權  
六殿と見たり何処とさして落あふると聲めく  
へ權六莞尔と笑ひ落行とい何事を筑前守み面會  
せむと思ふよより本陣へ行なり案内とよといひ



如降言カ...

しうの助作ささくら修理殿の子息ありのて案内仕  
らんと鎗を打振立向へい権六の跡より毛屋新内  
豊嶋猪兵衛進み来るを見て加藤孫六あまひや  
と駈来る助作権六と加藤渡り毛屋豊嶋と左右  
に請て戦ふさう豊嶋の片桐と棄て加藤に向ふ加  
藤豊嶋と見知さう只一鐘と突うさう猪兵衛の  
太刀と打振く孫六も切うさう兩人志さう戦ひ  
けさう如何さういけん猪兵衛脇腹をささうさ  
突れて息絶たり毛屋新内あれと見て権六と討を  
しと助け此場を落たりけりめくて助作孫六一  
處に打寄敵と待處に柴田三左衛門尉勝政なりと

名乗うけ来り筑前守の本陣へ何處とと血眼よあ  
つてのささうと見て御供申ひんんと北國勢百  
騎さう真さうと駈来るを脇坂基内をささうも  
見付是の我等り得るありといひありさう手の者十  
三四人と真先に進めて馳向ひけるさ柴田勢へ不  
案内あり爰の木根うこの岩角踏のさうつま  
つと倒れ五六十餘騎の討とさけりされとも越前  
勢大うさ今日と限りと思ひ切しとあさの親討れ  
の子いあれと助んとを子死をれとも弟のさり  
えの乗越死のの狂ひよ馳廻り引組ていさ  
違ひ相手を嫌う戦ひさうとも上方勢の雲霞の

大月巴乙編卷六

九



如く休らぬも案内者おれいあらの谷うけのこの  
つありあり切て出突りさしめ引つめ射け  
るもとよ越前勢より打破らばて残りありあも  
珍らしと軍なり鬨の聲矢叫ひの音天地も震動と  
る計あり勝家の本陣狐塚より賤岳より七里半  
なれいめくの如き手攻の合戦ありとい知のめか  
く漸夜明ふかきとあり味方再度敗軍を由と  
聞つとともせんうかか佐久間玄蕃えいその身  
壯健よしとありも打物の達者荒馬のりの名人か  
とい如何にもして筑前守より近つとたか一うあふ  
討取んと兜の緒とて鎧の上帯つとて引結ひ鹿

毛なる馬の八寸と餘ある北國第一の名馬と打の  
う賤岳の間道の人もうよとね捷經より筑前守の  
本陣の後と志して歩子を難あき走り近つと見え  
い近習の面々いつとも陣々へ分遣たり軍を分た  
た急ありと聞えしとよ馬廻りの若士多く處々  
へ走向て聞あけとい玄蕃えり推量の如く本陣へ  
誠と無人なり辛くして柵門の内へ走入て見る  
實も筑前守只一人床机よりうて軍の注進と待  
居たり玄蕃えいとて嬉しと千騎万騎と打取  
とも此一人のうとてい匠作の本意とげい不思議  
なるうと天道いりおれい此人を以て某と授け



大隈言ハル

ひげんのひで打ひしとて呉九と大音あけ佐久間  
玄蕃えりの筑前守と聲うく越へ筑前守尻目よと  
て少もさるるひ玄蕃えり推参あり罷退けと云て  
てとあつめひ玄蕃えりのりたる鹿毛馬前足折  
て躓つと倒る玄蕃え怒て立上り鉄の棒と取のへ  
只一打とめひ寄り膝一ひとて進得を去とてめく  
追近寄たり何れもく一打りたるゆと立上るひ  
腕ひとて取落と捧りそのまら打あけくするり  
の谷へ落入たり盛政志さるるひとちて太刀と  
拔膝とり寄て打んととれとも腰たふれあまりの  
不思議よめく見せひ筑前守と見しひそれあり

て霜といひて老人あつ盛政よんく驚さ正  
く筑前守と見つるめのと何めのあるやとあつ仰  
のと眼と定めてたりと見せひ筑前守秀吉るる  
めよあつこの幕の内より小袖一川打らあつ小具  
足るりりよ太刀持て悠々と出来り玄蕃え神妙ふ  
り某其方と討取こい安けと此度いさしゆるひ  
罷退けといひとて又幕の内へ入しりひ玄蕃えお  
されとて大膽不敵の秀吉うあさりとて此まらに  
引返さんも口惜し如何をんとおめひとふとせ  
んうとてひのけし立上りいうよもしと一太刀と進  
めひ小膝疼しひと只一足も歩まれととりくする

大隈言ハル



間、鹿毛馬も起上りぬと来り路へ立向ひ二聲三  
聲嘶けい玄蕃元その意とさとり然り引返と  
何よしても天運強き筑前守と心のうち打傾ふ  
る馬よ打のり柵門を出と馬もさるる進むゆ  
くさりととも餘り口惜りと追來り面を合せ  
あう本意もとひとあめくと引返さんと云甲斐  
あーと人のやのん今一度引うへ筑前守り陣  
中よ何ともあうるやと思ひうへけい玄蕃  
元馬の首と立直ひあゐの馬さう進ませ又引返  
して帰らんととれい足るや進むふるあり玄  
蕃元心ふるび二三町引返し余るもくゆりさ振

大階言ノ終末

十一

めへ見よ筑前守の陣の邊俄人馬の立さる  
く音のまひとくその数幾十万とゆふことと知  
と玄蕃元正しく無人と見つる筑前守の旗本あ  
の大勢の立たる何處も伏て置しやらん然あ  
武勇いさのを怖るねと武畧い我々及ふ処よ  
あうめくとい勿々容易と此人と討取んと元人  
ことさるのりあふまると心の中思ひあ再度の  
方便と工夫しと玄蕃元賤岳より引返せしとりの  
抑筑前守り極て玄蕃元り恐ひ來らんとと悟りつ  
とへ長濱の某寺の長老と呼寄筑前守のののく  
さそめりよ床机よめくらとと玄蕃元心をく

六門已し編末

三







